

『子不語』の妬鬼説話補遺

中野清

『癡鬼戀妻』(續新齊諧)卷五、という一則がある。

死して後も自分の妻に付きまとい續ける哀れな男の話である。

京師みやこに幽鬼が見えるという老婆がおり、いつも人にこんな話をしていた。このあいだある家で一人の幽鬼を見ました。

バカの極みと言えましょう。だが憐れなところも有り、しみじみと悲しいところも有ります。

この幽鬼は名は某と言い、某村に住んでいます。まあまあ暮らしをしており、死んだのが二十七八歳のころです。死んで百日ほどたった時に、その奥さんが私を付き添い婦にしてくれました。幽鬼はいつも中庭ちゅうていの丁子ぢょうしの樹の下に坐っておりました。奥さんの泣き聲が聞こえたり、男のお子さんの泣き聲が聞こえたり、奥さんが兄夫婦と言いつ争っているのを聞くと、生きている人の陽氣に焼かれて近づくことはできませんが、しかし窓の外で耳を傾けておりました。悲惨な顔つきがまぶたに浮かびます。何日か後に、媒酌人が奥さんの部

屋に來たのを見ると、ビックリして立ち上がり、あたりを見て回しておりました。結局その話はまとまらなかつたと聞いて、嬉しそうな顔をしておりました。しばらくして媒酌人がまたやって來て、兄夫婦と奥さんのところを行ったり來たりしている、走りまわって後について歩き、落とす物でもしたようにうろろろしておりました。

結納が届けられる日、木の下に坐りこみ、奥さんの部屋を見つめて、雨のように涙を流しておりました。これからは奥さんが出入りするたびに、その後を追ひ、未練の氣持ちが更に募つたようでした。

婚姻の前一日、奥さんが化粧道具を整理し荷造りしていると、幽鬼はまた軒先をうろつきまわり、柱にもたれて泣いたり、うつむいて何か考え事をしたりしているようでした。

奥さんの部屋からセキの音でもすれば、すぐに隙間から覗きこみ、徹夜で忙しくしておりました。この婆はため息をつ

いて、「バカな幽鬼だよ。そこまでやることはないだろう」と言ったのですが、聞こえなかったようです。

相手からの迎えのものが来て、燈りを持って先導しますが、幽鬼はよけて扉の角に立っていました。まだ首を伸ばして奥さんの様子を見えています。私は奥さんと一緒に出かけましたが振りかえって見ると、幽鬼が遠くから後をつけて来て、とうとう新しい相手の家にまでついてきました。だけど門神に阻まれて、頭を下げて哀願し、なんとか入ることができたのですが、また扉の角に隠れ、奥さんが結婚の禮するのを遠くから見、酔っぱらったように固まって立っている。奥さんが寢室に入ると、窓のそばまで行つてのぞき込み、燈りが消えてもまだ去ろうとはしない。とうとう中雷神に追いはらわれて、うろたえて逃げだしました。

私は前の家に戻りました。(幽鬼も戻りました)奥さんは息子さんを家に残して行つたんです。その子が母を探して泣いているのを聞くと、幽鬼は子供のまわりを回って、両手をもんで、どうしようもない様子です。そこにいきなり兄嫁が出てきてを子供を張り飛ばしました、幽鬼は地團駄を踏んで胸をたたき切齒扼腕という様子をします。この婆は見えていられなくなつて、とつとと歸ってきました。

京師みやこに媼有り能く鬼を視る。常に人に告げて曰く、昨某家きのふに於て一鬼を見る。癡なること絶と謂ふ可し。然れども情

『子不語』の妬鬼説話補遺(中野)

状憐む可く、亦た人の心脾をして凄動せしむ。

鬼名は某、某村に住む。家も亦た小康にして、死する時年二十七八なり。初め死して百日の後に、婦我を邀へて相伴せしむ。其の恆に院中の丁香樹の下に坐するを見る。或ひは婦の哭聲を聞き、或ひは兒の啼聲を聞き、或ひは兄嫂と婦と詬諍するの聲を聞けば、陽氣に逼燥せられて近づく能はざると雖も、然れども必ず耳を窗外に側そばつ。悽慘の色掬す可し。後に媒妁婦の房に至るを見れば、愕然として驚き起ち、左右に顧る。後に議成らずと聞き、稍喜色有り。既にして媒妁再び至り、兄嫂と婦との處に來往すれば、則ち奔走してこれに隨ひ、皇皇として失ふもの有るが如し。

聘を送るの日、樹下に坐し、目は婦の房を直視し、淚漉漉として雨の如し。是自り婦出入する毎に、輒ち其の後に隨ひ、眷戀の意更に篤し。嫁する前一日、婦奩具を整束するに、復た簷外に徘徊し、或ひは柱に倚れて泣き、或ひは首を俯して思うこと有るが如し。稍房内の嗽聲を聞けば、輒ち隙從り私に窺ひ、營營として夜を徹す。媼太息して曰く、癡鬼何ぞ是の如くするを必せん、と。聞こえざるが若し。

娶る者入り、火を乗り前に行けば、鬼は避けて牆隅に立つも、仍ほ首を翹げて婦を望む。吾婦と偕に出でて回顧するに、其の遠く遠く隨ひて娶る者の家に至るを見る。門神の阻む所と爲り、額を稽げ哀乞し、乃ち入る得れば、則ち牆隅に匿れ、

婦の禮を行ふを望みて、凝立すること醉狀の如し。婦房に入るに、稍稍窓に近づきて窺ひ、燭を滅し寢に就くに至るも尙ほ去らず、中雷神の驅る所と爲れば、乃ち狼狽して出づ。

仍りて婦の室に至る。婦一兒を留めて家に在り。兒の母を索めて啼くを聞けば、趨き出でて兒の四週に環繞り、兩手を以て相ひ搓み、奈何ともす可き無しの狀を作す。俄に嫂出でてを兒に一掌を撻てば、更に足を頓み心を拊ち、遙に切齒の狀を作す。媼これを視るに忍びずして、乃ち徑に歸る。

京師有媼能視鬼。常告人曰、昨於某家見一鬼。可謂癡絕。然情狀可憐、亦使人心脾淒動。

鬼名某、住某村。家亦小康、死時年二十七。初死百日後、婦邀我相伴。見其恆坐院中丁香樹下。或聞婦哭聲、或聞兒啼聲、或聞兄嫂與婦詬誶聲、雖陽氣逼燦不能近、然必側耳窗外。悽慘之色可掬。後見媒妁至婦房、愕然驚起、左右顧。後聞議不成、稍有喜色。既而媒妁再至、來往兄嫂與婦處、則奔走隨之、皇皇如有失。

送聘之日、坐樹下、目直視婦房、淚滂沱如雨。自是婦每出入、輒隨其後、眷戀之意更篤。嫁前一日、婦整束奩具、復徘徊簷外、或倚柱泣、或俯首如有思。稍聞房內嗽聲、輒從隙私窺、營營徹夜。媼太息曰、癡鬼何必如是。若弗聞也。

娶者入、秉火前行、鬼避立牆隅、仍翹首望婦。吾偕婦出回顧、見其遠遠隨至娶者家。爲門神所阻、稽顙哀乞、乃得入、

則匿牆隅、望婦行禮、凝立如醉狀。婦入房、稍稍近窗而窺、至滅燭就寢尙不去。爲中雷神所驅、乃狼狽出。

仍至婦室、婦留一兒在家、聞兒索母啼、趨出環繞兒四週、以兩手相搓、作無可奈何狀。俄嫂出撻兒一掌、更頓足拊心、遙作切齒狀。媼視之不忍、乃逕歸。

先行研究に、この一則のかなり詳しい梗概を載せた後、

この靈界取材記は、袁隨園先生の『續子不語』卷五「癡鬼戀妻」の一篇で、先生の輕妙洒脫な筆致を仔細に傳えることができないのは遺憾であるが、この幽靈男、生きてゐる女房の尻について廻るだけで、それ以上には再婚を妨げたりするほどの怨恨も才覺もないらしく、ただおろおろしているだけとは、幽靈ながらもいっそいじらしくペーソスがあって、なんとなく藤山寛美の演ずる阿呆息子の舞臺を觀る思いがするではないか。

たしかにこの幽鬼は未練たらしい振る舞いをするだけで、強い嫉妬心を持っているようでもない。再婚の邪魔をしようというほどの甲斐性もないようである。

藤山寛美の舞臺というのは、今の若い人たちには、もう判らないかも知れないが、いじらしくペーソスがあるというのは同感である。

しかし好事家の鑑賞としてはこれでいいのだろうか、學問的

な著述としては、あまりに杜撰だと言わざるを得ない。

本誌三十四集所載の拙稿『子不語』の「妬鬼説話」に、

このうちの⑥（『癡鬼戀妻』のこと）は本来は『閔微草堂筆記』から引いて、刪改を加えたもので、ここでは觸れない。

と書いた。

以前にも以下のように述べたことがある。

袁枚も『閔微草堂筆記』には目を通していたようだ。『續新齊諧』巻五に十一篇の『閔微草堂筆記』からの引用がある。しかし引用とはいっても、出所を明記しているわけではないし、適當に切り捨てる部分は切り捨てている。特に、文末につけられた紀昀の「世道人心」に關するコメントなどは、完全に切り捨てているのである。面白い話は、面白く讀めばいいのであって、下らない説教などは要らないというのが袁枚の考えなのだろう。

少し詳しく述べると、『續新齊諧』巻五に、『文人有夜光』から『飛天夜叉』まで十一則が引かれている。すべて『溧陽消夏錄』からの引用である。

もともと『閔微草堂筆記』は各一則ごとに題名を付してはいないので、これらの題名は袁枚が適宜付したものである。

この袁枚が『癡鬼戀妻』と名づけた一則は、もと『閔微草堂筆記』『溧陽消夏錄』四に見える。

『子不語』の「妬鬼説話補遺」（中野）

以下その刪改について詳しく検討を加えていくこととする。

【先太夫人外家曹氏、有媼能視鬼。外祖母歸寧時、與論冥事。媼曰、】（京師有媼能視鬼。常告人曰、）

昨於某家見一鬼、可謂癡絕。然情狀可憐、亦使人心脾淒動。鬼名某、住某村。家亦小康、死時年二十七。初死百日後、婦邀我相伴、見其恆坐院中丁香樹下、或聞婦哭聲、或聞兒啼聲、或聞兒嫂與婦詬誶聲、雖陽氣逼燦不能近、然必側耳窗外【竊聽】。悽慘之色可掬。後見媒妁至婦房、愕然驚起、【張手】左右顧。後聞議不成、稍有喜色。既而媒妁再至、來往兄嫂與婦處、則奔走隨之、皇皇如有失。

送聘之日、坐樹下、目直視婦房、淚洩洩如雨。自是婦每出入、輒隨其後、眷戀之意更篤。嫁前一【夕】（日）、婦整束奩具、復徘徊簷外、或倚柱泣、或俯首如有思。稍聞房內嗽聲、輒從隙窺、營營【者】徹夜。【吾】（媼）太息曰、癡鬼何必如是。若弗聞也。娶者入、秉火前行、避立牆隅、仍翹首望婦。吾偕婦出回顧、見其遠遠隨至娶者家、爲門【尉】（神）所阻、稽顙哀乞、乃得入。入則匿牆隅、望婦行禮、凝立如醉狀。婦入房、稍稍近窗、其狀一如整束奩具時。至滅燭就寢、尚不去。爲中霤神所驅、乃狼狽出。【時吾以婦囑歸視兒、亦隨之返、見其直入婦室。凡婦所坐處眠處、一一視到。俄】聞兒索母啼、趨出環繞兒四周、以兩手相【握】（搓）、作無可奈

何狀。俄嫂出撻兒一掌、【便】(更)頓足拊心、遙作切齒狀。

【吾】(媼)視之不忍、乃逕歸。

【不知其後如何也。後吾私爲婦述、婦齧齒自悔。里有少寡議嫁者、聞是事、以死自誓曰、吾不忍使亡者作是狀。嗟乎、君子義不負人、不以生死有異也。小人無往不負人、亦不以生死有異也。常人之情、則人在而情在、人亡而情亡耳。苟一念死者之情狀、未嘗不戚然感也。儒者見詔瀆之求福、妖妄之滋惑、遂累累持無鬼之論。失先王神道設教之深心、徒使愚夫愚婦悍然一無所顧忌、尙不如此里媼之言爲動人生死之感也。】

以上が『閱微草堂筆記』に載せる全文である。

【】の部分は袁枚が削除した部分。次の()内が袁枚による書き換え。【】以下になにも無い場合は單に削除である。

まず出だしの部分、

亡くなった母親の母かたの實家である曹氏に、幽鬼を見ることができるという婆さんがいた。外祖母が里歸りをした時に、婆さんと冥界の話をした。婆さんが言うには、

先太夫人の外家曹氏に、媼有り能く鬼を視る。外祖母の歸寧せし時、與に冥事を論ず。媼曰く、

先太夫人外家曹氏、有媼能視鬼。外祖母歸寧時、與論冥事。

媼曰、

「先太夫人」は亡くなった母親。「太夫人」は官僚の母のこと。

「外家」は「外祖家・姥姥家」と同じで外祖母の實家。「歸寧」は里歸り。

この部分は紀昀の常なる筆法で、誰から聞いた話なのかを記した部分である。外祖母の實家にいた老婆の話だから、紀昀自身は外祖母か母親から聞いたと言いたいのであろう。

ここを「京師有媼能視鬼。常告人曰」と書き換えたのは、「皆莫須有之事、遊戲調言。(みな有るはずもないことばかりの、ふざけた戲言です³⁾)」という袁枚の立場からは當然のことだろう。

七行目の「然必側耳窗外【竊聽】」の部分、窓の外で耳を側てているのならば「竊に聴く」はたしかに蛇足である。しかしこのあたりは、紀昀と袁枚の文章美學の違いなのであろう。

次の「【張手】左右顧」の部分、【張手】は有っても無くてもいいはずだ。

十一行目「嫁前一【夕】(日)」は、細かく晝間か夜かということだが、夜になってからというより、一日中のほうが可笑しみがあるし、十三行目に「營營【者】徹夜」との釣り合いもよい。この「者」は意味的には有っても無くてもいいものだが、これも文章美學の違いだろう。

すぐ下の【吾】(媼)太息曰の書き換えは、或いは一人稱小説から三人稱小説への、別の言い方をすれば、直接話法から間接話法への切り替えかとも考えたが、どうやら考えすぎであつたようだ。

「吾」よりも「媪」のほうがへりくだった一人稱と袁枚は考えたのだろう。二十一〜二行目も同じ。

十五行目「爲門【尉】(神)所阻」の部分は、「門尉」でも「門神」でも意味するところはなにも違いはないのだが、一般に「門神」のほうが通りがよいということなのだろう。

十八行目から十九行にかけてはかなり長い削除がある。

その時私は奥さんから家に戻り子供の面倒を見てくれと言われていたのですが、幽鬼も私について歸りました。見てみると幽鬼はすぐに奥さんの部屋に入り、奥さんが坐っていた場所、眠っていた場所など、いちいち見てまわりました。その時いきなり、

時に吾婦の囑を以て歸りて兒を視んとするに、亦たこれに隨ひて返り、見るに其の直ちに婦の室に入り、凡そ婦の坐する處眠むる處の所、一一視て到る。俄に

時吾以婦囑歸視兒、亦隨之返、見其直入婦室。凡婦所坐處眠處、一一視到。俄

この部分は、たしかにいきさかくどい感じがする。紀昀はあくまで事實であることを強調したいが爲に、媪が何故もとの家に戻ったのか、子供を残していてその面倒を媪に頼んだのだ。

幽鬼もそれについて家に戻ったのだ、とすることを説明したいのだろう。もちろん紀昀には小説を書いていると言う意識はないのだから、正確に事實を記録する必要を感じてこのように

『子不語』の妬鬼説話補遺(中野)

書いたはずだ。

その部分を袁枚は削除したのだが、結果としては文は縮まったものになる。しかし拙譯で()で補った部分くらいは有っても良いのかとも思うが、ちょっと考えれば誰にでも判ることだから、すべて削除で良いのかとも思える。

二十行目の「以兩手相【握】(搓)」の部分、「以兩手相」とあるのに「握」というのはたしかによくない。「握」なら片手でもできる。「搓(擦り合わせる)」という動作は片手でできるものではない。「以兩手相」に續く動詞としては「搓」のほうがよいと思われる。

二十一行目「【便】(更)頓足拊心」の「便」は「就」と同じく漢文訓讀で言えば「ればすなはち」である。

「俄嫂出撻兒一掌(俄に嫂出でてを兒に一掌を撻てば)」の部分が條件になる。「そこにいきなり兄嫁が出てきてを子供を張り飛ばしました(ので)」ということなる。

「更」にすると、「そこにいきなり兄嫁が出てきてを子供を張り飛ばしましたので、(益々)幽鬼は地團駄を踏んで胸をたたき切齒扼腕という様子をします、ということになる。

單に「人偏」を書き落としたということではないであろう。「更」のほうがよいようだ。

この部分、家藏の坊刻本(咸豐元年粵東同文堂校刊)では「使」に作るも、これは誤刻であろう。

さて最後の約百四十字ほどの削除だが、この部分は前後に分かれる。

その後この幽鬼がどうなったのかは知りません。後で私はそつと奥さんにこのことを話しました。奥さんは齒がみをして後悔していました。村に若くして後家になり再婚の話があった女がいましたが、この話を聞くと、命にかけて誓って、「死んだ夫にそんな様子をさせることなど私にはとてもできない」と言いました。

其の後如何なるを知らず。後に吾私に婦が爲に述ぶるに、婦齧齒して自ら悔ゆ。里に少くして寡たりて嫁を議する者有り、是の事を聞き、死を以て自ら誓いて曰く、吾亡き者をして是の状を作さしむるに忍びず、と。

不知其後如何也。後吾私爲婦述、婦齧齒自悔。里有少寡議嫁者、聞是事、以死自誓曰、吾不忍使亡者作是状。

媼が奥さんに打ち明け話をする、奥さんは後悔していましたが。漏れ聞いた、「若くして後家になり再婚の話があった女」も再婚をあきらめたという後日譚である。影響の大きさを強調したいのだから、小説としては蛇足である。削除することに問題は無いだろう。

ああ、君子の義は人を裏切らないし、生きてるか死んだかによる違いはない。小人は時として人を裏切る者だが、や

はり生きてるか死んだかによる違いはない。普通の人の情は、人が生きていれば人情が有り、人が死んでしまえば人情も無くなるのである。しかし一度でも死者のありさまを慮れば、悲しみの情に打たれるはずだ。儒者は佛教徒が佛に詣り他者を侮って御利益を求め、妖しげな説を唱えてますます人々を惑わすのを見て、靈魂不在の説を堅持し續けている。だがそれは、古代の聖王が神の道により教えを設けようという深い考えから外れたものなので、愚夫や愚婦にいい氣にならせひとつも反省の氣持ちを持たせないことになった。この田舎の婆さんの言葉が人の生死について感動を人々に與えるのも及ばないのである。

ああ、君子の義は人に負かず、生死を以て異なる有らざるなり。小人は往として人に負かざる無きも、亦た生死を以て異なる有らざるなり。常人の情は、則ち人在れば情有り、人亡ければ情亡きのみ。苟も一たび死者の情状を念はば、未だ嘗て戚然の感あらずんばあらず。儒者は（佛教徒の佛に）諂ひこれ（他者）を瀆り福を求め、これに妖妄して滋ます感はしむるを見て、遂に累累として無鬼の論を持す。先王の神道の教を設くるの深心を失へば、徒に愚夫愚婦をして悍然として一の顧忌する所無からしむるのみにして、尙ほ此の里の媼の言の人の生死の感に動を爲すに如かず。

嗟乎、君子義不負人、不以生死有異也。小人無往不負人、

亦不以生死有異也。常人之情、則人在而情在、人亡而情亡耳。苟一念死者之情狀、未嘗不戚然感也。儒者見諂瀆之求福、妖妄之滋惑、遂累累持無鬼之論。失先王神道設教之深心、徒使愚夫愚婦悍然一無所顧忌、尚不如此里嫗之言爲動人生死之感也。

最後は「君子」は「小人」という儒者のお説教である。面白いのは佛教を批判して、「儒者は（佛教徒の佛に）諂ひへつ（他者）を瀆あなどり福を求め、これに妖妄して滋ます惑はしむるを見て、遂に累累として無鬼の論を持す」といっている点である。無鬼の論を持っている儒教も、「先王の神道の教を設くるの深心を失」ったので、結局、愚夫・愚婦がやりたい放題をする歯止めにはならない。だから「田舎の婆さんの言葉が人の生死について感動を人々に與えるのにも及ばないのである」というのである。

結局、儒教は怪異譚に及ばないということになる。これは何のためのお説教なのであろうか。削除でいいはずだ。

要するに紀昀が、事実であることを強調するためのくどい説明を省き、最後のお説教も省き、袁枚がみごとに短篇小説作り直した好例と言えよう。

両者の文章美學の違いも見取れる、貴重な例である

『子不語』の妬鬼説話補遺（中野）

【注】

- (1) 澤田瑞穂『修訂鬼趣談義―中國幽鬼の世界』。平河出版社。一九九〇年九月。七五～七七頁。
- (2) 『袁枚「子不語」の鬼求代説話の筆法―紀昀の批判から』、『中國詩文論叢』第二十五集。
- (3) 『答楊笠湖』、『小倉山房尺牘』卷七。